

(実践報告)

## 本学における認知症看護教育方法の検討

樹神千尋<sup>1)</sup> 名和祥子<sup>1)</sup> 岡村絹代<sup>1)</sup> 松山 旭<sup>2)</sup>

### I. 緒言

わが国の認知症高齢者数は2025年に675万人に達すると言われており(内閣府, 2017), 今後看護師として従事する看護学生においても将来認知症高齢者に接する機会は多くなることが予測される。それに伴い看護学生に対する認知症についての教育を充実させることは喫緊の課題である。

本学においても, 認知症に関する知識や認知症高齢者に対する看護技術等については老年看護学概論(2年次前期)や老年看護学援助論(2年次後期), 老年看護学演習(3年次前期)で学修するが, 実際に認知症高齢者と接する機会を持つのは, 老年看護学実習(3年次後期~4年次前期)が初めてとなる学生も多い。認知症高齢者について理解するためには認知症についての疾患や症状, 治療への理解に加え, 認知症高齢者それぞれが生きてきた時代・生活背景を理解することが必要である。しかし看護学生にとって, 認知症を持つ高齢者は学生が高齢者の生活や看護を想像することは難しく, 認知症高齢者に関する知識を統合して看護実践に結び付けにくい。実際に, 老年看護学実習等において, 看護学生が認知症高齢者と関わる際に「認知症高齢者の看護を想像することの難しさ」や, 「看護学生にとっての事実と認知症高齢者にとっての事実のずれに気付かずに混乱する」こと, 「認知症高齢者の意思表示に圧倒されてしまう」といった困難を抱えていることが明らかになっている(松井, 2020)。

このような現状から, 看護教育において, 効果的な認知症看護の実践につながるよう認知症に関する視聴覚教材の使用(木島ら, 2014)や認知症の模擬患者を用いた演習(中原ら, 2014), 認知症高齢者を想定したロールプレイ(齋藤ら, 2006)などさまざまな教育方法が取り入れられている。本稿では, 看護系大学における認知症看護教育の学習形態と教育効果を明らかにし, 本学の認知症看護教育方法を検討したい。

### II. 研究目的

本研究の目的は, 看護系大学における認知症看護教育の学習形態と教育効果を明らかにし, 本学の認知症看護教育方法を検討する資料とする。

### III. 研究方法

#### 1. 方法

研究目的に合致する先行研究をレビューし, その結果を本学の認知症看護教育内容と比較しながら考察していく。

対象文献は, 2020年3月までに発表された全ての国内外の文献とした。国内文献は, 医学中央雑誌 web 版(Ver. 5)を, 海外文献は, PubMed を使用し検索した。国内文献の検索キーワードは「認知症」「看護学生」「教育」とした。海外文献の検索キーワードは, 「dementia」「nursing students」「education」とした。

---

1) 朝日大学保健医療学部看護学科

2) 元朝日大学保健医療学部看護学科

## 2. 分析方法

分析対象として抽出された文献を精読し、研究目的と合致した文献を対象に、学習形態と教育効果を取り上げた。学習形態は、中井ら(2014)の方法に基づいて一斉学習、小集団学習、個別学習、実習に分類し、それぞれ単独の学習形態のもの、併用した学習形態の、一斉学習+実習、一斉学習+小集団学習、一斉学習+個別学習、小集団学習+実習の合計8項目に分類した。教育効果については、各文献で得られた学生の学びを取り上げ、類似性に基づいて分類し、具体的な教育の効果としてネーミングした。複数の研究者で繰り返し検討し、共通理解が得られるまで行うことで分析の信頼性や妥当性を確保した。

## IV. 倫理的配慮

文献から抽出した語句、文節は原文を忠実に取扱い、著者の著作権を侵害しないように、また意図を正確に汲み取るように、共同研究者間で繰り返し熟考した。

## V. 結果

### 1. 文献数

国内文献は、計198件が抽出され、15件を対象にした。海外文献は、計135件が抽出され、4件を対象とした(表1)。

### 2. 学習形態

対象文献は、国内外の文献を合わせ実習が6件、小集団学習が5件、一斉学習が3件、一斉学習+小集団学習が2件、一斉学習+実習、一斉学習+個別学習、小集団学習+実習が各1件であった。

文献の特徴として、一斉学習では認知症に関する映画の視聴(久木原ら, 2013)(小山ら, 2008)や自作の視聴覚教材を使用した講義(安川ら, 2011)が行われていた。小集団学習では、認知症模擬患者を導入した演習(佐野ら, 2016)(中原ら, 2014)やロールプレイを用いた演習(齋藤ら, 2006)、事例検討のグループワーク(三澤ら, 2007)、シナリオを基にしたシミュレーショントレーニングの効果(Hauglandら, 2018)といった演習の中で認知症者をイメージできる学習方法などが行われていた。最も多かった実習では、認知症グループホームをはじめとした施設での実習(木下ら, 2014)(古城ら, 2014)(光貞ら, 2012)(棚崎ら, 2011)や夜間実習(岡本ら, 2015)、認知症教育を受けたメンターからの指導を受ける群と通常の指導を受ける群との比較を行った介入研究(Ecclestoら, 2015)といった、実際に認知症高齢者と接する機会を持つ場での学生の実習前後の知識の変化について報告していた。一斉学習+小集団学習では、認知症の疾患や治療、看護、関連する施設等に関する一斉学習の後、回想法の見学を行うことで学びを明らかにした(橋本ら, 2017)研究や、認知症の定義や背景、メカニズム等の基礎的知識を動画と講義で学習し、介入群には仮想認知症体験を行って学習前後で学習効果を調査していた(Kimzeyら, 2018)。一斉学習+個別学習では、認知症高齢者の看護援助に対する講義前後のレポートの内容を分析していた(道繁ら, 2013)。小集団学習+実習では、実習中にユマニチュードに関するミニ講義とDVD視聴を行ってから学生が実際に対象者にユマニチュードを実践し、学生が記載したその場面の記述からユマニチュードの評価を行った研究(木下ら, 2015)や、認知症デイケア施設で1日の臨床経験を受けた群と受けていない群に分け、10時間の認知症ブートキャンプを受けて認知症の知識や態度、ケアに対する内容を質問紙で調査していた(Mastel-Smithら, 2019)。

### 3. 学習形態と教育効果の関連

教育効果は学生の学びの類似性から「知識の深化」「自己認知の高まり」「認知症看護でのスキル」「対象理解」「学修のきっかけ」の5項目に分類された(表2)。また、学習形態と教育効果の関連の深さを線の多さで示し、学習形態と教育効果の関連性を図1に示した。

線の多さから、小集団学習と実習の教育効果の項目が多く、一斉学習+実習、小集団学習+実習は教育効果の項目が少なかった。

表 1. 対象文献一覧 (n=19)

発表年	文 献 名	著者名	掲載誌名
2006	教員が高齢者役を演じるロールプレイング演習における学生の学び—高齢者とその家族を対象とした外来看護師の役割に焦点を当てて—	齋藤 他	老年看護学, 11(1), 53-61
2007	模擬患者参加による認知症高齢者演習の学習効果—学生の受け止めの分析から	三澤 他	共立女子短期大学看護学科紀要, 2, 69-80
2008	「老年に関する映画」の教材化検討—14本の映画鑑賞とディスカッションを通して	小山 他	看護教育, 49(5), 428-433
2011	看護学生のグループホーム実習における認知症知識及び認知症高齢者イメージの変化とその要因の検討	棚崎 他	宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 4(1), 51-59
2011	高齢者を理解するための自作視聴覚教材に対する学生の反応	安川 他	札幌医科大学保健医療学部紀要, 13, 71-78
2012	看護学生のグループホーム実習における認知症知識と自己評価の変化に関する検討	光貞 他	宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 5(1), 29-39
2013	認知症高齢者を理解するためのビデオ教材の効果	久木原 他	インターナショナル nursing care research, 12(1), 161-169
2013	老年看護学教育における認知症高齢者への看護援助に対する教授方法の一考察	道繁 他	山陽論叢, 20, 15-24
2014	老年看護学実習における学内演習方法の教育効果(その1)ルーブリック評価表の活用効果と演習方法における課題の明確化	木下 他	新見公立大学紀要, 35, 23-26
2014	老年看護学実習における学内演習方法の教育効果(その2)文献抄読演習の役立ちと学びの広がり	古城 他	新見公立大学紀要, 35, 7-12
2014	生活機能に焦点をあてた認知症高齢者の視聴覚教材の作成と看護過程演習への活用に向けての課題の検討	木島 他	札幌医科大学札幌保健科学雑誌, 3, 35-42
2014	高齢者看護学教育における認知症模擬患者を導入した演習での学び	中原 他	共立女子大学看護学雑誌, 1, 17-24
2015	認知症グループホームの臨地実習を導入したユマニチュードの効果—看護学生がとらえた入所者の反応からの評価—	木下 他	インターナショナル nursing care research, 14(2), 145-153
2015	老年看護学総合実習における夜間実習の学び—認知症高齢者の対象理解をねらいとして—	岡本 他	淑徳大学看護栄養学部紀要, 7, 13-23
2015	An investigation of nursing students' knowledge of dementia: A questionnaire study	Eccleston CE, et al.	Nurse Educ Today, 35(6), 800-5
2017	認知症高齢者理解とコミュニケーション技術習得のための体験演習における看護学生の学び	橋本 他	日本認知症ケア学会誌, 15(4), 848-856
2018	Scenario-based simulation training as a method to increase nursing students' competence in demanding situations in dementia care. A mixed method study	Haugland VL, et al.	Nurse Educ Pract, 33, 164-171
2018	Effects of Dementia-Specific Education for Nursing Students	Kimzey M, et al.	Nurse Educ, 44(6), 338-341
2019	Dementia Care Education for Nursing Students	Mastel-Smith B, et al.	J Nurs Educ. 2019 Mar 1;58(3):136-143

表 2. 学習形態別教育効果の分類

学習形態(数)	学習方法(数)	学生の学び	学生の学びの分類	教育効果
一斉学習(3)	視聴覚教材の使用(3)	認知症のケアの方法の考えるきっかけとなった 家族ケアの考えるきっかけとなった 社会資源の活用を考えるきっかけとなった 高齢者への興味・関心 認知症患者に対する理解が深まった 家族に対する理解が深まった 社会的な支援の必要性についての理解が深まった	学修のきっかけ 学修のきっかけ 学修のきっかけ 学修のきっかけ 知識の深化 対象理解 知識の深化	知識の深化 対象理解 学修のきっかけ
小集団学習(5)	ロールプレイ(1)	コミュニケーションへの配慮 安全と安心への配慮 家族の介護に対する負担と不安の軽減への配慮	認知症看護でのスキル 認知症看護でのスキル 認知症看護でのスキル	知識の深化 自己認知の高まり 認知症看護でのスキル
	模擬患者(2)	学習の深まり 看護者としての自己洞察に繋がった 適切なケアを知るきっかけ 認知症高齢者と接する際の学生自身の態度の学び コミュニケーションを行う上での具体的な技術の学び	知識の深化 自己認知の高まり 学修のきっかけ 自己認知の高まり 認知症看護でのスキル	対象理解 学修のきっかけ

	視聴覚教材の使用 (1)	イメージしながらアセスメントできる 認知症が生活機能に及ぼす影響について考えることができる	対象理解 対象理解	
	シミュレーション演習 (1)	コミュニケーションスキルの向上 倫理的リフレクションの改善 認知症ケアでの強制を避ける	認知症看護でのスキル 自己認知の高まり 認知症看護でのスキル	
実習 (6)	グループホーム実習 (2)	認知症に関する知識の習得 認知症高齢者のイメージの好転	知識の深化 自己認知の高まり	知識の深化 自己認知の高まり
	実習中の文献抄読 (1)	高齢者の特徴の理解が深まった 老年看護学への関心が深まった 高齢者ケアの新しい考え方が深まった 高齢者ケアの知識が深まった 高齢者ケアの方法について理解が深まった	知識の深化 学修のきっかけ 知識の深化 知識の深化 認知症看護でのスキル	認知症看護でのスキル 対象理解 学修のきっかけ
	ルーブリック評価を用いた実習体験の振り返り (1)	体験の意味づけ 学びの深まり 学びの広がり 課題の発見 ケアの方法の気づき 学びの共有	対象理解 知識の深化 知識の深化 自己認知の高まり 認知症看護でのスキル 知識の深化	
	夜間実習 (1)	認知症の原因や症状を理解 その人らしい生活を支援することに関しての学び	知識の深化 知識の深化	
	3週間の支援付きの実習 (1)	認知症についての知識の深まり	知識の深化	
	一斉学習+小集団学習(2)	講義後の回想法の見学 (1) 動画での自己学習後の仮想認知症体験 (1)	対象理解の体験が深まった 対象理解の意義についての学び 「他者の立場に立つこと」についての共感が高まった 認知症の知識が深まった 認知症ケアに対する自信が高まった	対象理解 対象理解 知識の深化 自己認知の高まり
一斉学習+個別学習 (1)	講義とDVD視聴後のレポート (1)	コミュニケーション手段の学び 認知症に対する知識の必要性の学び 個別ケアの必要性の学び 家族ケアへの必要性の学び	認知症看護でのスキル 自己認知の高まり 知識の深化 知識の深化	知識の深化 自己認知の高まり 認知症看護でのスキル
一斉学習+実習 (1)	ユマニチュードに関する講義とDVD視聴後の実践 (1)	ユマニチュードの実践についての肯定的な評価 認知症高齢者への観察力が高まった 認知症高齢者への洞察力が高まった	自己認知の高まり 自己認知の高まり 自己認知の高まり	自己認知の高まり
小集団学習+実習 (1)	一日の実習を行った後の認知症ケアブートキャンプ (1)	認知症の知識が深まった 認知症に対しての態度が改善された 認知症ケアに対する自信が高まった	知識の深化 自己認知の高まり 自己認知の高まり	知識の深化 自己認知の高まり

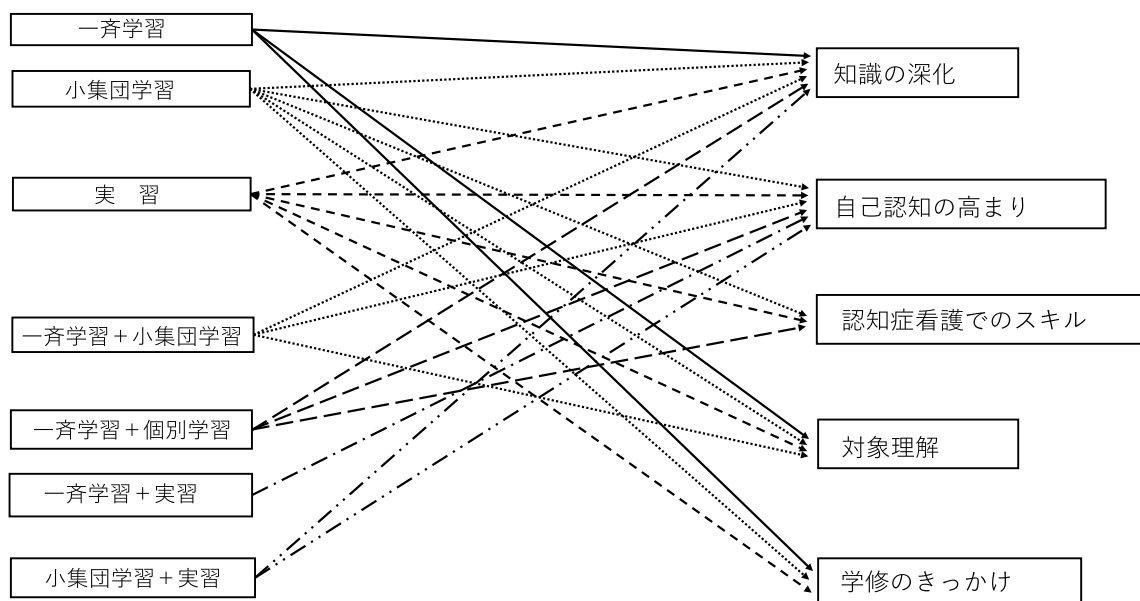


図1. 学習形態と教育効果の関連性

## VI. 考察

### 1. 文献数

認知症看護教育に関する研究は、2006年以降、2019年までに19件行われており、1年に1件程度であった。認知症高齢者が増加し、その教育が必要とされている現状や、研究の役割がある看護系大学の増加がみられる中でやや少ないと考えられる。また、研究の数は国内の方が多く行われているが、内容としては実践報告レベルにとどまっている。また、海外文献と比較して国内の方が早い時期から認知症看護教育を取り入れていた。これは海外文献の検索のツールとしてPubmedを使用したため、介入研究といったエビデンスの高い研究が抽出され、大学レベルで行われている実践報告が該当しなかった可能性もあると考えられる。

### 2. 学習形態

抽出した文献の中の学習方法の特徴として共通していたものは、小集団学習と実習が多いこと、学習形態の併用、シナリオの使用であった。日本と諸外国に見られた教育方法の違いは、国による看護教育課程の相違や認知症者の現状の影響が考えられるが、日本、諸外国ともに、実践的な教育方法に取り組んでいる中、海外文献ではより地域の中に入り込み、地域住民や実践家とともに、実際の場面に即した体験型の教育が有効であった。このことから、今後の認知症看護教育は、看護師有資格者のみならず、認知症の専門家や他職種などと協働しながら、地域社会での現実場面を想定した、リアリティの高い教育方法を小集団の体験型学習として組み立てることにより、学習の学びが高まることや、オンラインの活用および事前学習と関連づけることで、より効果が高まると考えられた。

本学においても、2020年度の実習は新型コロナウイルス感染症の影響により、介護老人保健施設での実習が困難となったため、学内実習となった。しかし、4週間の実習の中で認知症高齢者の事例を提示し、実習の中でロールプレイを用いて可能な限りその人にあった具体的でリアリティのあるケアを小集団で考える内容とし、リフレクションやフィードバックを行うことで学生からは良好な反応が得られた。また、実習予定施設に勤務する作業療法士や、地域包括支援センターで働く保健師から認知症高齢者に対する関わりや地域で生活することを支える具体的な支援についての臨床講義を聴講することで、学生は、地域社会での現実場面を想定した他職種との協働や、看護の役割について理解し、言語化することができた。また、瑞穂市地域包括支援センターの協力により、オンラインの認知症カフェに学生も参加する機会を持つことができた。オンラインではあるが、実際に認知症者とその家族と交流することで、自分自身が地域で生活する地域住民であると気づき、認知症者に対しての看護や、それを支える家族の思いについて考える機会となった(写真1)。角谷は、認知症カフェに参加することで地域住民としての自覚が芽生え、先入観を持たずに対象と関わることや相手に受け入れてもらうため自ら行動する自己のあり方に気付くことが可能であると述べている(角谷, 2019)。

以上のことから、今後の本学の老年看護学のカリキュラムにおいても、低学年時から地域の中に入り込み、地域住民や実践家と関わる体験型の教育を取り入れることで低学年時から認知症高齢者と地域社会の現実場面のイメージが可能になると考えられる。

### 3. 学習形態と教育効果の関連

学習形態と教育効果の関連から、小集団学習と実習は5項目すべての教育効果が得られていた。このことから、学生は「対象がいること」や「生活の場に入ること」、「仲間(学習者)がいること」でより教育効果が得られると推察できた。ロールプレイなどの小集団グループでの学びが効果的であると考えられるため、学生が疑似体験し、認知症高齢者のイメージがより持てるようなロールプレイなどの小集団学習を積極的に取り入れ



写真1. オンラインでの認知症カフェの様子

ることが必要である。特に、学生がグループダイナミクスを発揮することができるよう、教員が教育の中で共に考える姿勢や学習仲間と一緒に学ぶ環境づくりが重要である。特に教員は、小集団学習や実習のグループワーク時のファシリテーターとしての役割や、教授技術も高めていかなければならない。

「知識の深化」はほとんどの学習形態の効果として見られていた。しかし、それは「知識としてのきっかけ」ではなく、学生自身が自主的に認知症高齢者のことを思う「学修のきっかけ」となる必要がある。このことは、一斉学習を併用した学習形態からは効果が得られず、小集団学習や実習を含めた学習形態が有効であったことから考えられた。さらに、一斉学習は、「知識の深化」や「学修のきっかけ」「対象理解」には効果的であるが、「自己認知の高まり」「認知症看護でのスキル」までには結びついていないことから、他の学修形態を併用するなど、教員から学生への一方通行の教育にならないように、実働に重きをおいた学習計画を作り、学生の感情に働きかけて学生の実体験と結びつくような工夫が必要である。

そして、学生のレディネスや状況に応じて、学習形態と教育効果の関連性を考慮しながら、学習の順序性や学習形態の組み合わせを検討していくことで、より認知症看護の学びが深まり、実践につながると考えられる。

## Ⅶ. 結論

認知症看護教育に関する文献検討を行った結果、以下のことが明らかとなった。

1. 認知症看護教育に関する研究は、2006年以降、2019年までに19件行われており、1年に1件程度でまだ多いとは言えない現状であった。
2. 学習形態の共通点として、小集団学習と実習が多いこと、学習形態の併用、シナリオの使用があり、今後の認知症看護教育への活用の有効性が示唆された。
3. 学生の学びの類似性から「知識の深化」「自己認知の高まり」「認知症看護でのスキル」「対象理解」「学修のきっかけ」の5項目の教育効果に分類された。学習形態と教育効果の関連から、教員は小集団学習を積極的に取り入れ学生がグループダイナミクスを発揮することができるような環境づくり、ファシリテーターとしての役割や教授技術を高める必要性や、学生の実体験と結びつくような工夫の必要性が示唆された。

なお、使用した写真は関係者、学生の許可を得て撮影しております。

## Ⅷ. 文献

- 木島輝美, 安川揚子, 高橋順子, 奥宮暁子 (2014). 生活機能に焦点をあてた認知症高齢者の視聴覚教材の作成と看護過程演習への活用に向けての課題の検討. 札幌医科大学札幌保健科学雑誌, 3, 35-42.
- 松井宏樹 (2020). 看護学生が認知症高齢者に抱く困難に関する文献検討. 人間看護学研究, 18, 41-48.
- 内閣府 (2017). 平成29年版高齢社会白書(概要版) 高齢者の健康・福祉.  
[https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/gaiyou/s1\\_2\\_3.html](https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/gaiyou/s1_2_3.html), 2021-01-05.
- 中井俊樹, 佐藤浩章, 小林忠資, 寺田佳孝, 嶋崎和代 (2014). 看護現場で使える教育学の理論と技法(第1版). 97, 大阪:メディカ出版.
- 中原順子, 佐野望, 野田陽子, 北川公子 (2014). 高齢者看護学教育における認知症模擬患者を導入した演習での学び. 共立女子大学看護学雑誌, 1, 17-24.
- 齋藤美華, 森鍵祐子, 川原礼子 (2006). 教員が高齢者役を演じるロールプレイング演習における学生の学び—高齢者とその家族を対象とした外来看護師の役割に焦点を当てて—. 老年看護学, 11(1), 53-61.
- 角谷あゆみ, 宮良淳子 (2020). 認知症カフェにボランティアとして参画体験した看護学生の学び. ヒューマンケア研究学会誌, 11(1), 49-53.